

古典に親しみを持たせるための授業方法の工夫

—高等学校入門期における学習指導—

教育実践高度化専攻
授業実践リーダーコース

学籍番号 P11029 J

氏名 巽 利行

1 問題の所在と研究の目的

これまで古典の授業を担当し、生徒から「古典は難しい」「古典は外国語」ということばを数多く聞いてきた。そして、「古典は嫌いだ」ということばも聞いた。

「生涯にわたって古典に親しむ」ことが古典の授業で求められている。そのためには、生徒たちが入学して本格的に古典と向き合う、高等学校入門期の古典学習を工夫する必要があると考えた。

2 研究報告書の構成

本報告書は、次の4章で構成した。

第Ⅰ章 問題の所在と研究の目的

第Ⅱ章 高等学校における古典教育の理論と実践

第Ⅲ章 実践

第Ⅳ章 本研究のまとめと今後の課題

3 研究の概要

第Ⅰ章では、研究を展開するに到った問題の所在や研究の背景、目的を述べた。

古くは1954年に当時の文部省が、「逐語的に説明を加えたり、文法を解説したりしながら現代語訳を作っていくこと」が「古典学習をむずかしくし、興味のないものにした原因」と指摘している。50年以上も前に文部省が指摘した課題が、今もなお課題として取り上げられている。

平成21年に告示された『高等学校学習指導要領』では、必履修科目である「国語総合」の内容および内容の取扱いについて、古典の事項が大幅に増え、「伝統的な言語文化に関する事項」が新

設された。小・中学校にも同様の事項が新設され、小・中・高等学校と継続し、一貫性のある古典学習が求められるようになった。ここから読み取れるのが、国際化の流れを汲み、伝統的な言語文化への興味・関心を喚起するということである。そして、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することが求められている。

第Ⅱ章では、高等学校における古典教育の理論と実践として、古典教育の意義について論じ、先行研究・実践の調査を行った。

古典教育の意義は、諸家によって様々な論が呈示されている。それらを筆者なりにまとめると、内容的意義と言語的意義の2点になる。内容的意義とは、古典を学ぶことによって、昔と今を比較・照合し、現代の生活の糧とすることである。言語的意義とは、ことばとしての古典を継承していくものである。

先行研究・実践の調査から、入門期の指導法として、以下の5点を取り上げ、本研究の実践で講じる方略を示した。

(1)グループ学習

(2)現代語訳の活用

(3)創作活動

(4)教科書教材以外の教材の使用

(5)和歌の紹介

第Ⅲ章では、5月下旬から一か月実施した教育実践研究開発プロジェクト実習と、9月上旬から一か月実施した教育実践研究改善実習で実践を

行い、その効果の検証を試みた。

プロジェクト実習の、「これも仁和寺の法師」では、教材の理解を補助するために、結末の段落を削除した現代語訳を配布し、結末を創作させた。そしてグループで作品を交流させ、模造紙に絵を描いて発表させた。その結果、授業が活性化し、生徒たちは古典に親しみを持つようになった。

また、担当した授業7時間すべての冒頭5分を用い、和歌の紹介を行った。季節歌や恋歌、哀傷歌を紹介し、写真を提示したり、電子辞書で郭公の鳴き声を聴かせたりした結果、生徒たちは和歌に対して興味を持つようになった。

改善実習の「かたはらいたきもの」では、教科書教材以外の教材を使用し、発展学習で古典作品の現代版を創作させた。生徒作品の中には、現代の高校生の社会を見る鋭い目を垣間見ることができた。そして、グループで作品を交流し、全体に発表させたところ、他の人の作品を知ることができたこと、自分の作品をみんなに見てもらえたことで、生徒たちは達成感を抱いていた。

「雪のいと高う降りたるを」では、現代語訳を配布し、内容理解を生徒たちだけで行わせた。その際、「謎解き」と題して、本文に隠された謎をペアで話し合い考えさせた。その結果、本文の内容理解が十分にでき、満足度も高かった。

プロジェクト実習および改善実習を行った結果、生徒たちの古典に対する意識が変容した。(表1)は生徒に実施した質問紙調査の結果である。

表1 質問紙調査による生徒の意識の変容 (7件法)

		5月下旬	9月下旬	対応のあるt検定
作品	平均	3.76	4.22	N=112
	S.D.	1.33	1.44	t(111)=3.95**
授業	平均	4.33	4.69	N=111
	S.D.	1.25	1.23	t(110)=3.17**

**は、 $p<.01$ である。

古典の作品と授業について、好きか嫌いかを7件法で尋ねた。その結果、実習前の5月下旬と、2回の実習後の9月下旬では、古典の作品、授業ともに評価は高くなり、検定の結果、高度に有意な差が見られた。このことから、生徒たちは、古典に親しみを持つようになったと言える。

また、工夫を行った授業方法についての生徒の評価は(表2)の通りである。

表2 授業方法の工夫による生徒の評価 (5件法)

	生徒の評価の平均
①グループ学習の実施	4.08
②現代語訳の活用	4.27
③創作活動の実施	4.11
④教科書教材以外の教材の使用	4.12
⑤和歌の紹介	3.88

授業方法の工夫について、よかったかどうかを5件法で尋ねたところ、生徒たちは肯定的に評価していた。

第IV章では、本研究の成果と課題を述べ、今後の授業モデルとして、説話文学の教材を2つ提案した。

4 研究の成果と今後の課題

本研究では、授業方法を工夫することで、生徒たちの古典に対する意識が変容し、古典に対する興味・関心が深まったことが明らかになった。

今後の課題として、現代語訳の活用を挙げる。現代語訳を配布することは、古文の読解、知識理解に習熟していない入門期だからこそその工夫であり、入門期以降の現代語訳の多様な活用方法について吟味していきたい。それに加えて、さらなる授業方法の開発を進めていきたい。

修学指導教員 佐藤 真
伊藤博之
指導教員 吉田和志